
ライバルのこ・こ・ろ？

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルのこ・こ・ろ？

【Nコード】

N7930Y

【作者名】

usa

【あらすじ】

『ライバルのひ・み・つ？』番外編。

工藤新一のライバル、上坂凜の過去や、あの三人との出会いも明らかに。

本編を先にお読みください

0 : あの頃...

私達、いつまでも凜様のお側にいます

あたしらマジですよ！

久美だってずっと一緒ですよ！

あれはもう、四年も前になるかしら。

中学一年生の春のこと。

私は、母と二人で暮らしていたアメリカを離れ、故郷である日本に帰ってきた。

五歳になった頃、警察官である父が逮捕した男に誘拐されるまでしか過ごしていないから、ほとんど記憶もなく、これと言って感じることもない。

ただ、日本語は懐かしいと思えた。

金髪や青い目に慣れていた私は、久々に見る黒い髪や目に戸惑った。

私は本当に日本人だったんだと、改めて思った。

「凜。あなたはね、これからここで暮らすのよ」

約八年ぶりに見上げた我が家。

母は私にそう言ったんだ。

「明日からは、米花中へ通うの。いいわね？」

私はこくつと頷いた。

「久しぶりだから、色々戸惑うことはあるかもしれないけど、早く慣れましょうね」

「…はい」

正直、どうでも良かった。

どこで暮らそうが、どこの学校へ通おうが、私はいつでも一人だった。

五歳のときに、私は人間としての感情を全て捨てた。

他の人間なんて、信用できない。

いつかは本性を現して、誰かを裏切る。

いちいち信じるなんて、馬鹿を見るだけだ。

子供ながらに、あの時感じたんだ。

あの男、父が逮捕し、私を誘拐した男は、最初はいいい人だと思っていた。

『おじさんは君のお父さんのお友達なんだ。ずっと仕事ばかりなんだろ、お父さん。それなら、少し懲らしめてやろう』

あの男は当時幼かった私にとっては、子供を助けてくれるヒーローのようだった。

淋しかった。

刑事だからと、いつも家を空けている父。

母は母で、辛さを誤魔化すように遊んでいた。

あの頃私の側にいたのは、安い給料で雇われた家政婦だけだった。

けれども、その人からも愛情を感じたことはない。

いつもいつも、面倒臭そうに私を見ていた。

毎晩、月に向かって囁いていた。

「私の本当のパパとママを返して」

って。

私は両親を、偽物と思っていた。

だから私のことを、ずっとほったらかしにしてるんだ、と。

いつか本物の両親が現れて、幸せになれる。

そう信じていた。

もし彼らが私の本当の両親だとしたら、これは賭けだった。

私がいなくなったら、二人はどう反応するのだろう。

慌てる？

悲しむ？

それとも…ホッとする？

知りたかった。

私は僅かな期待を胸に、男の提案にのつた。

両親は私を愛してくれているのだろうか。

答えは…否、だった。

1：愛情

私が誘拐されたと聞いた時の両親の反応。

男から許可を得て、物陰からこっそりのぞいていた。

愕然とした。

父は舌打ちをし、母はため息をついた。

面倒なことになった、とでも言うように。

父がボソッと、「これもチャンスかもしれない…」と言っているのが聞こえた。

情けなすぎて、涙も出なかった。

私はここまで、愛されていなかったのか。

しばらくの間、足が鉛になったかのように動けなかった。

少しでも両親の愛情を信じた私は、自分を笑った。

あの人たちは、私をこれっぽっちも愛してなんかいない。

むしろ、厄介な異物としか思っていなかったのだから。

このまま、いつそのこと、いなくなってしまうのか。

ヒーローと感じた男と共に、この家から永遠に逃げてしまおうか。

この後のことは、よく覚えていない。

笑いだす前に、気が遠くなっていた。

いつの間にか私はその場から遠ざけられていて、気付いたらボロボロの倉庫のような所で、男に手足を縛られていた。

「おじちゃん…？なんでしるの？」

幼い私には意味がわからず、聞いたんだ。

「おじょうちゃん。おじさんはね、これから大事なお仕事があるんだ。だから、ちよっとの間、こうして大人しくしておくれ」

「おしごと…？」

「そうだよ。おじょうちゃんは、ここでこうしてくれているだけでいいんだ。いいね？」

男は私をなだめるかのようにそう言った。

私は疑うことなく、こくりと頷いた。

いや、正確にはまだ怖かったんだ。

また…裏切られることが。

結局この後、私はこの男に裏切られた。

男はただ単に、私を人質にして、父の解雇と懺悔を要求したかっただけだった。

いきなり抱きかかえられ、首筋に刃物を突き付けられた時、ようやく私は騙されたことを理解した。

ギラリと尖ったナイフの光が、未だに忘れられない。

しかしそれを父は見越した様子で、あっさりと男の居場所を掴み、他の警官に私を任せて男を追った。

走る父の後ろ姿を見ながら、私はもう何も感じなかった。

彼は、結局父としてより、刑事としての自分を選んだ。

彼は娘という名の道具を使い、男を捕まえようとした。

それなら、私も利用しよう。

刑事である、父の立場を…。

彼が逃がしたあの男を、私が捕まえてみせよう。

いつか私は、父を越え、跪かせてみせる。

父だけじゃない。

私のことを娘とも思ってくれていない母も、何かにつけて小言を言う家政婦も、全部全部、見返してやる。

その為には、私は人間をやめることが必要だった。

全ての感情を捨て、私は人間ではなくなった。

2：探偵

ロスから戻り、私の中学生生活が始まった。

自己紹介をしたときに、他の人からの熱い視線を感じた。

私はよく、美人だと言われる。

正直言えば、自覚はある。

ロスにいた頃も、何度か男子から告白を受けたことがあった。

だが全部断った。

私には感情というものが存在しない。

いわばサイボーグのようなもの。

だから、恋愛なんてできない。

人を好きになるという意味がわからない。

誰かを大事に思うなんて…不可能だ。

例え探偵であつても、私は他人の心など、理解できない。

したくもない。

私の仕事は、ただ犯人をあげるだけ。

今はまだ無名でも、いつか…そう、幼い頃に一度会った彼が言っていた、シャーロック・ホームズになってみせる。

そうして、両親を見返してやる。

あの男を捕まえて、正面切って、私の勝ちだと言ってやる。

私一人で。

刑事では単独行動は不可能だ。

大勢いる中の警官Aではダメだ。

私が一人でやらなければ、意味がない。

だから私は、探偵になると決めた。

探偵になって、堂々と一人であいつを捕まえてやろう。

そのためにも、今日も私は図書館へ足を運ぶ。

情報収集も大事な捜査の一環。

まあ、他の人と関わらずに済むということもあるが、私は学校以外の大半の時間をここで費やしている。

静かな所にいれば、心が落ち着いてくる。

ここにいれば、極力話をしなくてすむ。

じっと活字やパソコンに目を通していればいいだけ。

人間のくだらない話に付き合うより、ずっと有意義な時間だ。

私はこれからも、一人で生きていく。

誰の力も借りない。

誰の言葉も信じない。

私が彼女らに出会ったのは、このころだった。

2：探偵（後書き）

次回、ついにあの三人組の登場…！？

見て下さい！（――）＜

3：出会い

中学が始まって、そろそろ三週間が経つ。

クラスメイトも、話しかけても私がなんの反応も示さないことに気付いたらしい。

私に近寄ってくる人もいなくなり、楽だった。

さ、今日も図書館でも…。

「あ、あの！」

…誰？

「突然すみません！ちょっといいですか？」

私の目の前にいたのは、三人の女の子。

話しかけてきたのは、中心にいる眼鏡の子。

制服が一緒のようだけど…知らない子。

「上坂凜さん…ですよ？私達、同じクラスのもんです」

私がそれでも黙っていると、なぜか彼女達は勝手に自己紹介を始めた。

「私は、長田沙羅といます」

「あ、あたしは、今藤天音です」

「青野久美です」

馴れ馴れしい子たち…。

私は無視して通り過ぎようとした。

「ま、待ってください。お願いします!」

沙羅とかいう子が、私を呼び止めた。

正直、ウザったかった。

どうせ、私に声をかけてどっという反応をするか、試しているだけなんでしょうし。

「私達、あなたに憧れているんです!」

…は？

「これから、図書館行くんですね？あたしらも一緒に行きます!」

「行かせて下さい!」

何なの、この子たち。

からかっているだけのくせに、なんでこんなに真剣な目をしてるの…？

「別に私たちは、あなたの邪魔をしようっていうんじゃないありません」

「純粹に、側にいたいだけなんです！」
「お願いします！」

変な子達ね…。

こんな私についていくつていうんだから。

「…私の邪魔だけはしないでちょうだい」

踵を返して歩きはじめる。

すぐに天音とかいう子が動いた。

「荷物お持ちします！」

「結構よ」

「それなら、凜さんをお運びしましょうか？」

「…あなた、馬鹿？」

不思議。

こんな風に誰かに向かって話したのは、久しぶりだわ。

それも、今さつき会ったばかりの子たちに…。

でもダメよ。

信用だけは、してはいけない。

幼い頃の思い出が甦る。

もう、あんな思いはごめんよ。

人を信じるなんて、できないわ…。

4：一人

私の考えは、間違っていた。

「凜様。教室までお供します」

「あ、荷物持ちましょうか？」

「ランチ一緒にいいですか？」

学校に行くたびに、彼女達は私の居場所を嗅ぎつけてやってくる。

迷惑

この一言がぴったりだわ…。

「近寄らないで。この間は特例よ」

ニコニコしながら私の後ろにいる彼女達に、私は冷たく言った。

「お気になさらずに。私達は凜様をサポートしたいだけですから」

「その呼び方もやめてちょうだい。苛々するのよ」

それでも、彼女達は屈するどころか、ますます私に寄ってきていた。

不思議というより、変な子達。

この私に、なんでここまでして近づくのよ…。

本当、誰かが私の反応を確かめて、おもしろがってんじゃないか、

って思っちゃうわ。

いや…実際そうなのかもしれない。

だって、何を言われても反応を示さない、人間とは違う私を尊敬する人なんて、いる？

それも、まだ中学に入っただけの女の子が。

いくらなんでもおかしいわよ。

きつと、陰じゃ私のことを笑っているんだわ。

そうよ。そうに決まってる。

「今日も図書館に行くんですか？」

「私達もついていきます」

また来た。

でも、もう騙されないわ。

「結構よ。さつさと私の前から消えて」

「えっ？」

とぼけた顔して…。

「わかってるのよ。あなた達が私を笑いものにしようとしている」とぐらい」

「凜様。何を…？」

「いいから、すぐに消えてっ！」

頭痛がする。

思えば、こんなに怒鳴ったのは初めてだ。

私は頭を押さえた。

「あつ、大丈夫ですか？」

「保健室行きます？」

「いいから、私のことは放っておいて！」

手を差し伸べてきた彼女達に私は叫んで、その手を振り払った。

「凜様……？」

「そう呼ぶのもやめてって言ったでしょ！？ウザったいのよ、そういうの！今後一切、私に近付かないで！！！」

そう言って私は、彼女達に背を向けた。

追いかけても来ない。

やっぱり、凶星だったのね。

まあ良いわ。

これで終わっただんだもの。

私に近寄る人はもういない。

最初に戻ったのよ。

友だちなんていない。

薄い繋がりなんて、ほしくもないわ。

これからも私は、一人で生きていく。

そう。

ただ、一人で…。

5：最初の事件

彼女達がもう来なくなつて、一週間が経つ。

正確には、私が無視をしているだけだね…。

今私は、偶然居合わせた引つたくりの現場にいる。

犯人があつた男なわけないけど…これも何かしら参考になるかもしれないし、一応その場にいた。

犯人は左利き。

右肩にバッグを持っていた女性から、ナイフで紐の部分の部分を切つて奪つて行つたらしい。

黒いパーカーにジーンズという、どこにでもいそうな格好をしていたと言つし、警察はすでに諦めモード。

とりあえず、現場付近にいた人たちに、個別に聴取をしているだけみたいね。

もちろん、私もその一人。

でも、こういう時は遠慮なく父親の肩書を利用させてもらつて。

「上坂凜です。父も刑事なんですよ。今警視庁で刑事部部长で…」

そう言うと、所轄の若い巡査なんか、真っ青になって謝罪してくる。

容疑者の中に、左利きは二人。

でも二人とも、この場にはたまたまいただけだと言ってるし…。

被害者の持ち物も、一切持っていなかった…。

ふう…ん。

面白そうじゃない。

どうやら警察は、この二人のどちらかが犯人と決めてかかっているらしいし、私が犯人を見つけてあげるわ。

「あなた、右利き？」

「あん？何でお前みたいながきに言わなくちゃなんねーんだよ」

いかにも不良っぽい格好をした高校生。

私をなめないでくれる？

「父が刑事でして…。ちょっと頼まれたんですよ。あ！あなた高校生ですよ？煙草が見えてるわよ？」

そう言うと、途端にばつが悪そうな顔をして、「右利きだよ」と、ぶっきらぼうに言ってくる。

その後も、数人に声をかけ、利き手を確認してみた。

最後に、痩せていて気の弱そうな男。

「利き手を教えてくれませんか？」

「ん？ああ…僕は右利きですよ。どうかしたのかい？」

「いえ…あ、いけない！」

私はハンカチを落とした。

もちろん、わざと。

でも彼は、ちゃんと右手でそれを拾った。

それを軽く叩いてくれた。

あら…この人…。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

その時、警察がさっきの二人をどちらもパトカーに乗せようとしていた。

私は頬が緩むのを感じた。

「待って下さい」

堂々と声を張り上げ、所轄の刑事を止めた。

「その二人は、犯人じゃありません」

その刑事は、私がさっき言ったことを覚えていたらしく、渋々二人を放した。

「犯人はおそらく…この人です」

そう言つて、私は今の男を指差した。

「な、何を…」

「あなたの右手に、大きな傷がありました。おそらく、カッターがなんかで切ったのでしょう。ですが、右利きの人間に、右手に傷ができると言つのも、おかしい話ですね…。そう思いませんか？」

それでも、男は首を振つて否定した。

「何を根拠に…。た、確かに、僕は十年前まで、左利きでした。ですけど、それだけで犯人にされちゃ困りますよ！」

「なら…見せてくれますよね？あなたのその、大きなバッグの中身…」

そう言つと、男は露骨にビクツとした。

「ほら、身の潔白を証明したいんでしょう？その中を見せてくれて、やましい所がなければ、私ももう何も言いませんけど」

男はがっくりと項垂れた。

「ご協力、感謝します！」

刑事が私に向かって敬礼した。

「御苦労さま」

良い気分だ。

私は警察を越えた。

一人で犯人を導いたんだ。

これが探偵としての、私の初めての事件だ。

そして見事、解決した！

「バッグの中身は、やはり被害者の持ち物でした」
「そう…」

待って。

「それだけ？」
「はい。そうですが」

おかしいわ。

確かあの男は、犯行に刃物を使ったはず。

それもないの？

ってことは…。

どこかから、悲鳴が聞こえた。

それと同時に、私は右の腕に熱さを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7930y/>

ライバルのこ・こ・ろ？

2011年12月3日17時10分発行